令和７年度　第２回「京都市地域コミュニティ活性化推進審議会」摘録

日　時	令和７年１０月１４日（火）午後６時３０分～午後８時３０分
場　所	京都市役所本庁舎１階　第１会議室
出席委員	９名（志藤会長、前田副会長、荒川委員、岩井委員、宇野委員、玉村委員、中本委員、橋本委員、森本陽介委員）
欠席委員	６名（尾崎委員、河合委員、丹治委員、野村委員、森本つばさ委員、行元委員）
傍 聴 者	１名
事 務 局	文化市民局：並川 地域自治推進室：長谷川、馬場、片木、鳴海、石田、中嶋、早﨑、小林、中野、福本
議事次第	１　新ビジョン案について ２　その他（事務連絡など）
会議資料	資料１　委員名簿 資料２　座席表 資料３　新ビジョン案について

【議事内容】

１．新ビジョン策定について

資料３に基づき説明。

＜主な意見＞

志藤会長：まずは 10 月 13 日に開催されたまちづくり大交流会に参加された方から感想を伺いたい。

宇野委員：まちづくり活動に主体的に関わっている人が参加しており、京都をよくしたい、地域をよくしたいという思いを持っている方の熱い思いを聞けた。今後の広がりを感じられるいい機会だった。

中本委員：色んな地域の方の集まりの場では勉強になることが多く、地元で活動するに当たってのヒントも得られた。参加者の中にも活動の限界を感じている方はいるようで協力してくれそうな人を探している方も見受けられた。私自身色んな方とつながることができたので、今回のような交流会は定期的に開催した方が深まってくる。

志藤会長：確かに実際に活動している方が参加者の中心だったので、非常に地域に対する情熱を持っている方が多かった。意見を聞く中では、「やりがい」にフォーカスがあたっていた印象。自分だけやその周辺だけでやるのではなく、色んな人達と一緒に協力し、やりたいことが実現して喜び合うことが次のエネルギーを創り出すという展開を皆さんの話を聞いていてひしひしと感じた。関われば関わるほど地域の色んなことが分かって、地域を好きになって、思いが強くなるとい

う好循環の様子を見ることができた。一方で、壁に当たっている昔ながらの地域の話もこれまで聞いてきているので、両者をどう掛け合わせるかがビジョンや審議会のテーマなのだと感じた。掛け合わせの一つの答えが、つながりづくりとしての区 Hub・市 Hub のように思う。中本委員が言うように、今回の交流会のような場を沢山つくれば、面白いことはもっと出てくるように思う。

それでは新ビジョン案の審議を始めたい。横文字で分かりづらい表現については市民の方に通じるように文言を整理すべき。

玉村委員：創りたい社会、あるべき社会について明記してはどうか。ビジョン案には今後の方向性やそのために取り組むことが書かれているが、つながる、支え合う、創り合うの先に目指す社会が理念的に一言であってもいいのではないか。その社会を実現するために、つながる、支え合う、創り合う、がある方が分かりやすい。例えば、利他や共助といった難しい言葉ではなく、感謝、喜び等の情感に響く分かりやすい言葉であるべき社会という理念を掲げて、それを実現するためのビジョンと説明した方が、市民には入ってきやすい。

橋本委員：私は NPO の活動や学区の役員もやっているが、自治会や町内会といった地域コミュニティとなかなか結び付かないというのが実感としてあった。最近ようやく地元の方達にも活動を知ってもらうようになり、先日市役所前のイベントを実施した際には町内会の方が来てくれて嬉しかったが、ここまでに約６年かかった。地域の方も新たな活動や取組に興味を持って取り組んでいく必要があるかもしれないと感じ始めているようなので、新しいビジョンは、自分達のコミュニティだけではなく、京都市を創っていこうと一住民が思えるようなものにしていく必要がある。

宇野委員：先日、回覧が回ってきた際に、「今年は運動会に参加しない」というお知らせがあり、そこに「運動会は地域の人達の顔が見れる唯一の機会なのに、なぜ役員だけで参加しなくていいと決めたのか」と書き込まれていた。今まで代々やってきていたこと、例えば地蔵盆は地域の子ども達の顔がわかる機会で、区民運動会はもう少し広い範囲の色んな住民の人達と出会える機会。そういった大事さを受け継ぎながらやっていくことが本当に大事で、それが結果として防災につながったり、様々なことに紐づいていることを、私自身もコミュニティに参加することで実感した。こういったことを、住民の皆さんにも伝えていきたい。

森本（陽）委員：地蔵盆相談会で８０代ぐらいの方から、役員が地蔵盆をしないと決めたが有志の寄付で地蔵盆をやりたいと思っており、何か京都市の助成金はないかと相談を受けた。地域の方の間でもギャップがあるのだと実感した。京都市は私も含め、地域に関わりたい人はどんどんのめり込める環境であり、サポート体制も整っている。地域活動の大事さを伝えるために情報を届けることが大事。市民しんぶん等で広報はされているが、特にマンション等で自治会の情報にアクセスし

にくい環境の人達に届けること、そういった人達がうっかりつながる機会、場づくり等が必要ではないか。

志藤会長：割と身近なコミュニティの中では、その近くで人が歩いていたり、顔見知りの人が何か言ってきたり、何かの行事がそこで行われたりするという状況が生まれており、そこに何か関わりができて広がっていくかもしれない。

中本委員：自治連合会の役をやっているが、自治会や町内会が自治連合会を抜けることが多く、昔と違ってメリット、デメリットの話を出されると辛いところがある。防災面ではつながっていた方がいいと思うので、私の地域では防災訓練に力を入れており老若男女問わず、お年寄りから子ども向けのイベントを同時開催したりしている。森本委員が言っていたうっかりのことでいうと、公園のかまどベンチを使って防災訓練をしつつ、BBQ をしたりしている。通りがかった人に声をかけたら参加してくれて、つながりができた人もたくさんいる。自治連を抜けることの歯止めが効いていない中でも、新しいマンションができたら自治会加入の働きかけを自治連としては行っている。大学生にイベントにも来てもらっており、そのことで新しいことが生まれたり、新たなコミュニティができて複数の団体が同じ方向を向いて活動している様子を見ており、学区としても応援していきたい。

ビジョンについては、確かに経営理念のようなものがあった方がわかりやすい。

岩井委員：私の地元の雲ケ畑地域のような住民 100 人ぐらいで担い手がいない地域としては、今までと同じことをしていたら進歩もアップデートもしないとは思うが、ビジョン案に書かれていることを全部取り組んでいこうとすると、今以上のことを色々な人がやらないといけないことになる。地域活動に積極的な方と、実際に地元の地域で自治会や自治連合会の運営をしている方との考え方のギャップは間違いなくあるように感じる。受け手側は何かして欲しいとは思っていない人もいるのではないか。12 ページにキーワードが３つあるが、「譲り合う」や「思いやり」といった言葉を入れてはどうか。支え合うは能動的でいいとは思うが、多様性を尊重し合うためにはどこかで譲らないと折り合わないことがある。

荒川委員：福祉関係の立場からになるが、14 ページの施策④に、高齢者や障害のある方、子どもなどが多層的な支え合いの下で暮らしてくと書いていただいたのは非常にありがたい。地域の課題としては防災・防犯、環境や教育などもある中で、福祉に関わるキーワードと政策を掲げていただいたのは非常によかった。推進例のところでもいくつか挙げていただいているが、学区社会福祉協議会の取組でいうと、例えば健康すこやか学級事業では市内で約 215 学区が取り組んでおり、年間延べ１０万人ぐらいの高齢者が参加して、３万数千人がボランティアとして手伝ってくれている。地域活動のプロのような地元住民の方が入ってアイコンタクトで次やることがわかるというような地域は、これまで力強く地域活

動を展開してこれたかと思う。そういった地域も限界が来る中で、今後何をしていくかも考えていかないといけない。地域のまちづくりのプロ集団をこしらえていくことと、個別の活動をする関係者、それは市民だけでなく学生や会社の人も含まれるが、これらの人との関係性をどうつくっていくかがチャレンジの部分になる。

これはお願いになるが、施策④の推進例が他の施策例と比べると「どうやって」のような仕掛けの部分が書かれていない。高齢者の分野で言うと、地域包括ケアシステム等があるのではないか。また、18 ページの区役所像の視点①～③の中に重層的支援体制について記載があるが、すでに区役所が取り組んでいる取組が書かれていないので、そこをうまく取り入れていただければ組織の垣根も下げられるいいビジョンになるのではないか。

玉村委員：先程の岩井委員の話に同感した。支え合うは負担感があるように思う。支え合うでなく、特技が活かせる、活躍できるというように一人称に置き換えるだけで印象は変わってくる。受け手側には何かして欲しいと思っていない人もいるのではということもよく分かる。それが余白だと思う。伝わり方として、全て用意されたものに乗っからないといけないとなると主体性がなくなる。主役は地域の皆さんなので、皆さんが輝けるよう我々が行政として頑張りますという見せ方の方が、余白が伝わる。最近読んだ本に、適度な負債感が大事と書かれていた。最初から負債があっても、人からものを施されて大きな負担感を持っていても大変なので、適度なところが大事。その適度な負債感がどうやって生まれるかというと、最初は誰かから何かしてもらうという経験で、それを返したいという思いが出てきて、それが自発性につながって、お互いに支え合う社会ができていくという話は参考になった。私達も会員数を増やす活動をしているが、数を増やすことが目的ではなく、私達が幸せに暮らせる地域づくりのために活動を続けている。そこで大事にしているのは一対一の関係。まず声かけをして、集まりに来てもらったらフォローアップしながら関係性をつくって、次も来てもらえるようにという取り組みを続けている。やはり、枠組みや義務、役割があってということではなく、余白があり入る機会があり、居場所や活躍できる場所があり喜び合うといった自発性の種のようなものをどうやって地域づくりに組み込んでいくかという発想で考えていった時に、言葉づくりやその投げかけやフォローの仕方に何か一つ筋が通ったように思うので、それらが活動につながっていけばいいように思う。

志藤会長：つながれる、支え合える、創り合えるというように言葉のニュアンスを変えた方が余白は伝わるかもしれない。何よりも住民自身が自分達で市を創れる、創りたいと思えるような市政であって欲しい。それと、地域コミュニティの活性化が最終的な目標ではなく、まちづくりのプロセスというのは、主体をどのように

つくるのか、その中でどのように自分の存在を確認するのか、そして自分がどのように役に立つのかということの気づきや、それが継続していくことが大事なので、活性化はその手前の目標であるように思う。

前田副会長：ビジョンを支える理念は必要だと思う反面、市内でも色んな地域があるので難しいところもあると思う。一つあるとすれば、10 ページにも書かれているが、自分達のまちは自分達でつくるということが本質の部分だと思うのでそういった表現を入れてはどうか。地域コミュニティの活性化を目指すことが逆効果になるような地域や状況もあると思うので活性化だけを言う必要はないと思うが、活性化と言うと、自分達のまちがどういうまちで自分達はどう関わっているとか、そこで何か創れるといった自分事として考えられることもある。創り合うのところに、具体的な活動だけでなく各地域の将来像を描くことを行政がバックアップするといった理念的なことを入れてもいいように感じた。

荒川委員：学区社協ごとに毎年重点目標を決めてもらうようにしている。職員が地域住民と懇談や意見交換をし、地域の方にも考えてもらうのだが、しっかりと議論ができるかどうかの地域の温度差やばらつきはある。そこでしっかり議論できた学区は次の取組に主体性が生まれたり、勢いがついたり、方向性が共有される。例えばまちづくり協働コーディネーター等にそういった場に入ってもらうこともいいのではないかと思った。

前田副会長：地域住民が愛着を持っているのは京都市全体ではなく、自分の所属する組織や学区等だと思うので、理念を無理に統一する必要はなく、やはり自分達のまちを自分達で創るという本質の部分が入れられればいい。そのままの表現だと「自分達」が強い感じがするので、譲り合うとか支え合うといったニュアンスを入れてもいいかもしれない。

事 務 局：ビジョンを読んだ人が負担に感じてはいけないので、行政のスタンスをもう少しはっきりさせていく。一緒にどうですか、というようなニュアンスに。余白を埋め合う、創り合う、またはそのプロセスを喜び合うといったことも伝えたい。指摘いただいたように地域コミュニティの活性化自体は目的ではなく、その結果、市民が幸せに暮らせるような社会を創ることが最終目的だが、その一歩手前にあることをどう表現したらいいか悩んでいる。何かアイデアをいただけると非常にありがたい。

玉村委員：例えば、標題の下の説明に、幸せに暮らせる社会を最終的には目指していくということを示し、その一歩手前として取組等の説明をして、その後に市役所の立ち位置を書くと、整理がつくのではないか。

事 務 局：委員の意見を聞き、確かに主役が地域だということが伝わってこないと感じた。主役はどこまで行っても地域住民で、その方達がどういう暮らしをしたいか、どういう地域にしたいかが大前提としてあって、そのために行政が支援・サポー

トすることが基本的な形だと思っているが、書かれている内容は施策が並んでいて行政が全てやるという印象を与えかねない。

志藤会長の仰ったつながれるといった可能性としての表現についても検討する。

志藤会長：それぞれの地域や状況に合わせて、難しいところは一緒にやりましょうということが伝わる表現にできたらいい。主に福祉関連の推進例の記載の中で、推進という文言が何度も出ており行政施策の印象を受ける。重層的支援も行政だけがやるわけではないので、もう少し民間事業者や社協と一緒に取り組むような推進例を入れてはどうか。行政の施策と、地域と一緒に進める取組とが混在しているところも見られるので、整理した方がわかりやすい。

中本委員の発言にあったメリットデメリットを気にする人は情報を集めたいのだと思う。自治会町内会等で人とつながることで、自分にどんな未来が来るか気になっているのではないか。ただこれは一緒にやらないと分からない部分があるので、明確な答えを出すことが難しい。この審議会でも何度も出ている話で、メリットデメリットを探っている人にどう情報を届けていくかも今後考え、答えられるようにした方がいいと思う。

難しいとは思うが、橋本委員が言うように、一人一人の市民が市をどういう風に創りたいか考えられるような市政運営ができることが理想。

玉村委員：昨日の交流会でも出た、正解がないからこその可能性という考えが大事だと思う。正解がないから一緒に考えていくというメッセージでもいいのかもしれない。

宇野委員：市長が、地域の人達が色んなことを起こすことで、発酵、熟成されて京都がいいまちになっていく「ぬか床のようなまち」と言われていたが、本当にそういうことだと思っている。区役所の職員から、イベントの参加者がいないのでチラシを配ってもらいたいと相談を受けたことがあるが、私達も区役所に困っていることを言いに行くだけではなくて、区役所が困っていることを聞かせてもらえればもっと協力できることがあると思う。なので、一方的に何かをしてもらうのではなく、一緒に創り上げていくことが大事だ。

前田副会長：行政からまず開いていくというメッセージは第一歩であって、それを宇野委員が言うように市民も行政を支えるという相互補完の関係になればいいと思う。

志藤会長：区 Hub に任せているという状態はよくないので、住民も一緒に区 Hub を創っていくということが分かるように伝えていかないといけない。

中本委員：私はよく区役所に行っていて、区役所と学校をつなげるような役割も担っているように感じている。区役所と学校の関係が良好であれば地域も良くなる。自分達のまちは自分達で守るという意識が大事だ。

岩井委員：私の住んでいる地域は、住民が動かないと地域が回っていかないので地域に

関わりながら何でもやっているが、区役所は区役所なりに地域に関わってくれている。地域の特性にもよるのではないか。

事 務 局：これまでまちづくりや市民参加に全く興味がない方や地域があることへの危機感から、そういった部分をどう底上げしたらいいのかというところに気をつかっていたが、委員の皆様から前向きな議論をいただき非常にありがたい。地域で異なっている部分をどうしていくかが根源的なところだと思っている。

志藤会長：それぞれ頑張っている地域がある。スーパープレイヤーがいる地域もあるが、そうでない地域もあり、そういった地域に向けて何ができるのかを考えてもらいたいと思っている。自分が住んでいる地域や関わっている地域、働いている地域をどれだけ愛せるかが分かれ目だと思う。めんどくさいことや辛いことはあるが、地域との関わりを積み重ねていくことで熟成されて好きになっていくのではないか。隣の地域がうまくいってなかったら手伝いに行ってみようかと思えるようにもなってもらいたい。最終的にどういう姿を目指すかは自分達で決めて、自分の地域を好きになってもらいたい。地蔵盆や運動会も自分の地域を好きになっていく活動の一つだと思うので、そういった仕掛けが大事だと思う反面、多すぎても疲れてしまうので、その塩梅が難しいこともわかる。

橋本委員：宇野委員も言っていたが、私も区役所が悩んでいることを一緒に考えたいと思っている。区役所と地域が同じ立場でいてくれると嬉しい。

森本（陽）委員：玉村委員から経験の話が出たが、私自身も学生団体 edunka として地蔵盆に関わった一番のきっかけは小学生時代の地蔵盆の経験が大きかった。edunka の創設メンバーは、私だけが京都出身だったが、京都に縁がなかったメンバーとともに、地域の方の協力をいただきながら地蔵盆を復活することができた。私達の地域への関わりを見た 10 歳ぐらいの子ども達が 20 歳になるまでビジョンは続くので、地域活動を経験した人達がどうなっていくかという内容も含まれていたら面白いと思う。

前田副会長：地域コミュニティ活性化ビジョンと市民参加推進計画が一本化すると聞いてどうなるかと思っていたが、この審議会で話してきた内容がベースになっている印象を受けている。

個人的には、自治会町内会といった慣れない関係の中でできたつながりは、色んな活動の本当の基盤になると思っているので、新ビジョン案の中にコミュニティが柱として書かれていることは大変良かった。

志藤会長：自分達がやってきたことをじっくり噛みしめて、次につないでいくといった循環ができれば、その時々に起こる様々な課題に対して、焦ることなく時間をかけて、みんなで一緒にそれに対して向き合っていけると思う。京都らしさは色々あるとは思うが、ゆっくり考えよう、色んな方面から考えようというところも京都らしさ。そういう意味では 10 年間のビジョンをじっくり熟成させて、10 年

後どういう地域になっていくか大変楽しみである。今だけ、金だけ、自分だけに目を向けてしまうと持続できない。このビジョンで、そうではないことをやりましょうという投げかけにしていきたい。